

福岡大学医学部 数学

2021年 2月2日実施

[I] 次の をうめよ。答は解答用紙の該^が当^{とう}欄に記入せよ。

(i) 1 とは異なる 2 つの正の数 x, y が $\begin{cases} x^{x+y} = y^{10} \\ y^{x+y} = x^{90} \end{cases}$ をみたすとき、 $x + y =$ (1) であり、さらに $(x, y) =$ (2) である。

(ii) 2 つの関数 $f(x), g(x)$ を $f(x) = x^2 - 2x + 3, g(x) = 2x^2 + 6x - 1$ と定める。このとき、 $f(x) \geq g(x)$ をみたす x の値の範囲は (3) である。関数 $h(x) = \min\{f(x), g(x)\}$ は、 x に対して $f(x)$ と $g(x)$ のうち、大きくない方を値にもつ関数を表すとする。 x が $-2 \leq x \leq 2$ の範囲にあるとき、 $h(x)$ の最大値を M 、最小値を m とする。このとき $(M, m) =$ (4) である。

(iii) 1 辺の長さが 1 の正六角形 OABCDE において、線分 AC を 3 : 1 に内分する点を P とする。ベクトル \vec{OP} を \vec{OA} と \vec{OE} を用いて表すと $\vec{OP} =$ (5) である。また、 $\triangle OBP$ の面積は (6) である。

解答

(i) (1) 30 (2) (3, 27) (ii) (3) $-4 - 2\sqrt{5} \leq x \leq -4 + 2\sqrt{5}$ (4) $\left(3, -\frac{11}{2}\right)$
 (iii) (5) $\frac{7}{4}\vec{OA} + \frac{3}{2}\vec{OE}$ (6) $\frac{5\sqrt{3}}{16}$

解説

(i) 2 つの方程式について、自然対数をとると、

$$(x + y) \log x = 10 \log y \cdots \textcircled{1}$$

$$(x + y) \log y = 90 \log x \cdots \textcircled{2}$$

①, ② 辺々かけると、

$$(x + y)^2 (\log x)(\log y) = 900 (\log x)(\log y)$$

$x \neq 1, y \neq 1$ より、 $\log x \neq 0, \log y \neq 0$ であるから、

$$(x + y)^2 = 900$$

$x > 0, y > 0$ より、 $x + y > 0$ である。よって、

$$x + y = 30$$

このとき、 $y = 30 - x$ より、① に代入して、

$$30 \log x = 10 \log(30 - x)$$

$$3 \log x = \log(30 - x)$$

$$\log x^3 = \log(30 - x)$$

$$x^3 = 30 - x$$

$$x^3 + x - 30 = 0$$

$$(x - 3)(x^2 + 3x + 10) = 0$$

x は正の実数より, $x^2 + 3x + 10 > 0$ である。これより,

$$x = 3, y = 30 - 3 = 27$$

よって,

$$(x, y) = (3, 27)$$

(別解)

$x^{x+y} = y^{10}$ の両辺を $(x + y)$ 乗して,

$$x^{(x+y)^2} = y^{10(x+y)} \dots \textcircled{3}$$

$y^{x+y} = x^{90}$ の両辺を 10 乗して,

$$y^{10(x+y)} = x^{900} \dots \textcircled{4}$$

③, ④ より,

$$x^{(x+y)^2} = x^{900}$$

$x \neq 1$ より,

$$(x + y)^2 = 900$$

(以下省略)

(ii)

$$\begin{aligned} f(x) \geq g(x) &\iff x^2 - 2x + 3 \geq 2x^2 + 6x - 1 \\ &\iff x^2 + 8x - 4 \leq 0 \end{aligned}$$

これを解いて,

$$-4 - 2\sqrt{5} \leq x \leq -4 + 2\sqrt{5}$$

これより,

$$h(x) = \begin{cases} g(x) & (-4 - 2\sqrt{5} \leq x \leq -4 + 2\sqrt{5}) \\ f(x) & (x \leq -4 - 2\sqrt{5}, -4 + 2\sqrt{5} \leq x) \end{cases}$$

$-4 - 2\sqrt{5} < -2 < -4 + 2\sqrt{5} < 2$ より, 次のようになる。

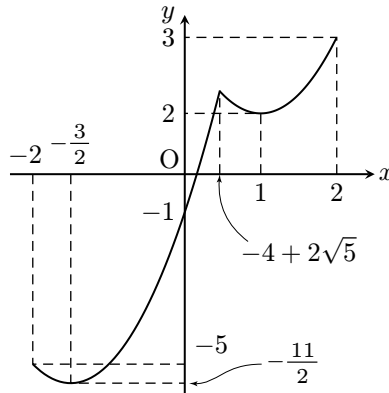
(ア) $-2 \leq x \leq -4 + 2\sqrt{5}$ のとき,

$$\begin{aligned}
 h(x) &= g(x) \\
 &= 2x^2 + 6x - 1 \\
 &= 2\left(x + \frac{3}{2}\right)^2 - \frac{11}{2}
 \end{aligned}$$

(イ) $-4 + 2\sqrt{5} \leq x \leq 2$ のとき,

$$\begin{aligned}
 h(x) &= f(x) \\
 &= x^2 - 2x + 3 \\
 &= (x - 1)^2 + 2
 \end{aligned}$$

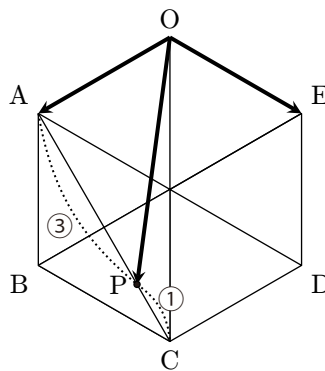
(ア), (イ) より, $y = h(x)$ のグラフは下のようになる。



上のグラフより, $x = 2$ のとき最大で $M = 3$, $x = -\frac{3}{2}$ のとき最小で $m = -\frac{11}{2}$ となる。

$$(M, m) = \left(3, -\frac{11}{2}\right)$$

(iii)

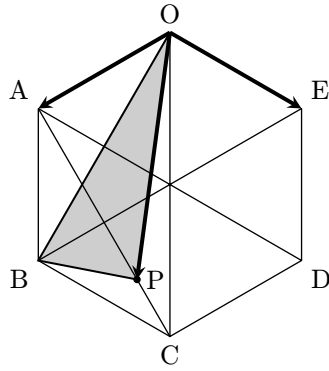


$\vec{OC} = 2\vec{OA} + 2\vec{OE}$ であり, $AP : PC = 3 : 1$ である。よって,

$$\begin{aligned}
 \vec{OP} &= \frac{1}{4}\vec{OA} + \frac{3}{4}\vec{OC} \\
 &= \frac{1}{4}\vec{OA} + \frac{3}{4}(2\vec{OA} + 2\vec{OE}) \\
 &= \frac{7}{4}\vec{OA} + \frac{3}{2}\vec{OE}
 \end{aligned}$$

よって,

$$\vec{OP} = \frac{7}{4}\vec{OA} + \frac{3}{2}\vec{OE}$$



また、 $\triangle OBP$ の面積について、

$$\begin{aligned}
 \triangle OBP &= (\text{四角形 OABP}) - \triangle OAB \\
 &= \frac{3}{4} (\text{四角形 OABC}) - \triangle OAB \\
 &= \frac{3}{4} \cdot 3\triangle OAB - \triangle OAB \\
 &= \frac{5}{4} \triangle OAB \\
 &= \frac{5}{4} \cdot \frac{1}{2} \cdot 1^2 \cdot \sin 120^\circ \\
 &= \frac{5\sqrt{3}}{16}
 \end{aligned}$$

よって、

$$\triangle OBP = \frac{5\sqrt{3}}{16}$$

(別解)

$$\vec{OB} = \vec{OA} + \vec{AB} = 2\vec{OA} + \vec{OE} \text{ より,}$$

$$\begin{aligned}
 |\vec{OB}|^2 &= |2\vec{OA} + \vec{OE}|^2 \\
 &= 4|\vec{OA}|^2 + 4\vec{OA} \cdot \vec{OE} + |\vec{OE}|^2 \\
 &= 4 \cdot 1^2 + 4 \cdot 1 \cdot 1 \cdot \cos 120^\circ + 1^2 \\
 &= 4 - 2 + 1 \\
 &= 3
 \end{aligned}$$

$$\vec{OP} = \frac{1}{4} (7\vec{OA} + 6\vec{OE}) \text{ より,}$$

$$\begin{aligned}
 |\vec{OP}|^2 &= \frac{1}{4^2} |7\vec{OA} + 6\vec{OE}|^2 \\
 &= \frac{1}{16} (49|\vec{OA}|^2 + 84\vec{OA} \cdot \vec{OE} + 36|\vec{OE}|^2) \\
 &= \frac{1}{16} \left\{ 49 \cdot 1^2 + 84 \cdot \left(-\frac{1}{2}\right) + 36 \cdot 1^2 \right\} \\
 &= \frac{1}{16} (49 - 42 + 36) \\
 &= \frac{43}{16}
 \end{aligned}$$

また、

$$\begin{aligned}\overrightarrow{OB} \cdot \overrightarrow{OP} &= (2\overrightarrow{OA} + \overrightarrow{OE}) \cdot \frac{1}{4} (7\overrightarrow{OA} + 6\overrightarrow{OE}) \\ &= \frac{1}{4} (14|\overrightarrow{OA}|^2 + 19\overrightarrow{OA} \cdot \overrightarrow{OE} + 6|\overrightarrow{OE}|^2) \\ &= \frac{1}{4} \left\{ 14 \cdot 1^2 + 19 \cdot \left(-\frac{1}{2}\right) + 6 \cdot 1^2 \right\} \\ &= \frac{1}{4} \left(14 - \frac{19}{2} + 6 \right) \\ &= \frac{21}{8}\end{aligned}$$

以上より,

$$\begin{aligned}\Delta_{OBP} &= \frac{1}{2} \sqrt{|\overrightarrow{OB}|^2 |\overrightarrow{OP}|^2 - (\overrightarrow{OB} \cdot \overrightarrow{OP})^2} \\ &= \frac{1}{2} \sqrt{3 \cdot \frac{43}{16} - \left(\frac{21}{8}\right)^2} \\ &= \frac{1}{2} \sqrt{\frac{75}{64}} \\ &= \frac{5\sqrt{3}}{16}\end{aligned}$$

よって,

$$\Delta_{OBP} = \frac{5\sqrt{3}}{16}$$

[II] 次の をうめよ。答は解答用紙の該欄がいたうに記入せよ。

(i) 点 (x, y) が不等式 $|x-1| + |y+1| \leq 1$ をみたすように動くとき、 $x^2 - \frac{1}{2}x - y$ の最大値は (1) であり、最小値は (2) である。

(ii) 自然数 a と b が次の 2 条件

- $a > b$,
- a, b の最大公約数は 10, 最小公倍数は 140

をみたすとき、組 (a, b) をすべて求めると $(a, b) =$ (3) である。また、自然数 a, b, c が上の 2 条件に加えて次の 3 条件

- $b > c$,
- a, b, c の最大公約数は 2,
- b, c の最小公倍数は 60

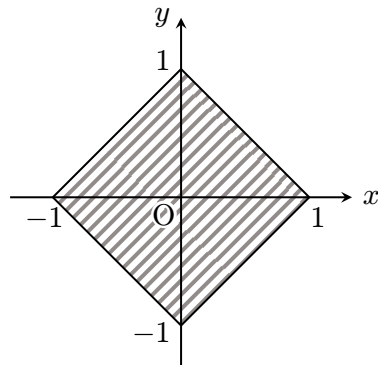
をみたすとき、組 (a, b, c) をすべて求めると $(a, b, c) =$ (4) である。

解答

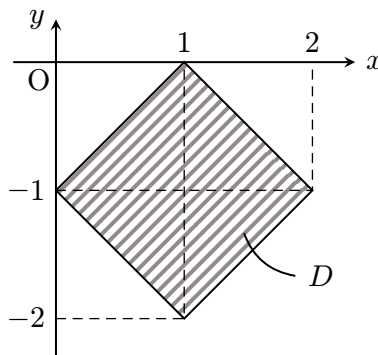
(i) (1) 4 (2) $\frac{7}{16}$ (ii) (3) (140, 10), (70, 20) (4) (70, 20, 6), (70, 20, 12)

解説

(i) 不等式 $|x| + |y| \leq 1$ をみたす点 (x, y) の集合は図の斜線部分である (境界線上の点を含む)。



この領域を x 軸方向に 1, y 軸方向に -1 だけ平行移動した領域が、不等式 $|x-1| + |y+1| \leq 1$ をみたす点 (x, y) の集合である。この領域を D とする。



また、 $x^2 - \frac{1}{2}x - y = k$ とおくと、

$$\begin{aligned} y &= x^2 - \frac{1}{2}x - k \cdots \textcircled{1} \\ &= \left(x - \frac{1}{4}\right)^2 - \frac{1}{16} - k \end{aligned}$$

①は軸の方程式が $x = \frac{1}{4}$ で下に凸の放物線を表す。①が点 $(2, -1)$ を通るとき、または、点 $(1, -2)$ を通るとき k は最大である。①が点 $(2, -1)$ を通るとき、

$$\begin{aligned} k &= 2^2 - \frac{1}{2} \cdot 2 - (-1) \\ &= 4 \end{aligned}$$

①が点 $(1, -2)$ を通るとき、

$$\begin{aligned} k &= 1^2 - \frac{1}{2} \cdot 1 - (-2) \\ &= \frac{5}{2} \end{aligned}$$

よって、求める最大値は **4** である。

$y = x^2 - \frac{1}{2}x - k$ が線分 $y = x - 1$ に接するかどうか考える。 $y = x^2 - \frac{1}{2}x - k$ において、

$$y' = 2x - \frac{1}{2}$$

微分係数が 1 となるとき、

$$2x - \frac{1}{2} = 1 \iff x = \frac{3}{4}$$

したがって、 $y = x^2 - \frac{1}{2}x - k$ が $y = x - 1$ ($0 \leq x \leq 1$) に接するように k を定めることができ、このとき k は最小となる。 $x = \frac{3}{4}$ のとき、 $y = -\frac{1}{4}$ であるため、

$$\begin{aligned} k &= \left(\frac{3}{4}\right)^2 - \frac{1}{2} \cdot \frac{3}{4} - \left(-\frac{1}{4}\right) \\ &= \frac{7}{16} \end{aligned}$$

よって、求める最小値は $\frac{7}{16}$ である。

- (ii) a, b の最大公約数が 10 なので、 $a = 10a'$ 、 $b = 10b'$ (a', b' は互いに素な自然数、 $a' > b'$) と表せる。このとき、 a, b の最小公倍数は $10a'b'$ と表せ、これが 140 より、

$$10a'b' = 140 \iff a'b' = 14 \cdots \textcircled{1}$$

よって、①を満たす自然数 (a', b') は、

$$(a', b') = (14, 1), (7, 2)$$

$$\therefore (a, b) = (140, 10), (70, 20)$$

$b > c$ であり、 a, b, c の最大公約数は 2 なので、 c は b より小さい正の偶数である。

(ア) $(a, b) = (140, 10)$ のとき

c は 10 より小さい正の偶数で、 b と c の最小公倍数が 60 となるような c は存在しない。

(イ) $(a, b) = (70, 20)$ のとき

c は 20 より小さく 5 で割り切れない正の偶数で、 b と c の最小公倍数が 60 となるような c は、

$$c = 6, 12$$

(ア), (イ) より、

$$(a, b, c) = (70, 20, 6), (70, 20, 12)$$

[III] 関数 $f(x) = e^{-x} \sin x$ について、次の問に答えよ。ただし、 e は自然対数の底とする。

- (i) x が $x \geq 0$ の範囲にあるとき、 $f(x)$ の最大値と最小値を求めよ。
- (ii) 部分積分法を繰り返し用いて定積分

$$V_n = \int_0^{2n\pi} |f(x)| dx, \quad n = 1, 2, 3, \dots$$

の値を求めよ。さらに極限值 $\lim_{n \rightarrow \infty} V_n$ を求めよ。

解答・解説

(i)

$$f'(x) = -e^{-x}(\sin x - \cos x)$$

$0 \leq x \leq 2\pi$ において、 $f'(x) = 0$ のとき、

$$x = \frac{\pi}{4}, \frac{5}{4}\pi$$

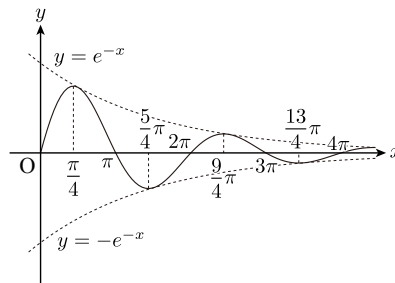
$0 \leq x \leq 2\pi$ における $f(x)$ の増減表は次の通り。

x	0	...	$\frac{\pi}{4}$...	$\frac{5}{4}\pi$...	2π
$f'(x)$		+	0	-	0	+	
$f(x)$	0	↗	$\frac{1}{\sqrt{2}}e^{-\frac{\pi}{4}}$	↘	$-\frac{1}{\sqrt{2}}e^{-\frac{5}{4}\pi}$	↗	0

ここで、

$$\begin{aligned} |f(x + n\pi)| &= |e^{-(x+n\pi)} \sin(x + n\pi)| \\ &= e^{-n\pi} |f(x)| \dots \textcircled{1} \end{aligned}$$

よって、 $f(x)$ の極大値・極小値はともに公比 $e^{-2\pi}$ ($0 < e^{-2\pi} < 1$) の等比数列となる。



ゆえに、最大値・最小値ともに $0 \leq x \leq 2\pi$ の区間に存在する。

$$\text{最大値 } \frac{1}{\sqrt{2}}e^{-\frac{\pi}{4}}, \quad \text{最小値 } -\frac{1}{\sqrt{2}}e^{-\frac{5}{4}\pi}$$

(別解)

$$f'(x) = -e^{-x}(\sin x - \cos x)$$

k を整数 ($0 \leq k \leq n-1$) とする。 $2k\pi \leq x \leq 2(k+1)\pi$ において、 $f'(x) = 0$ のとき、

$$x = \frac{\pi}{4} + 2k\pi, \frac{5}{4}\pi + 2k\pi$$

$2k\pi \leq x \leq 2(k+1)\pi$ における $f(x)$ の増減表は次の通り。

x	$2k\pi$...	$\frac{\pi}{4} + 2k\pi$...	$\frac{5}{4}\pi + 2k\pi$...	$2(k+1)\pi$
$f'(x)$		+	0	-	0	+	
$f(x)$	0	↗	$f\left(\frac{\pi}{4} + 2k\pi\right)$	↘	$f\left(\frac{5}{4}\pi + 2k\pi\right)$	↗	0

ここで、 $g(k) = f\left(\frac{\pi}{4} + 2k\pi\right)$, $h(k) = f\left(\frac{5}{4}\pi + 2k\pi\right)$ とすると、

$$\begin{cases} g(k) = \frac{1}{\sqrt{2}}e^{-\frac{\pi}{4} - 2k\pi} \\ h(k) = -\frac{1}{\sqrt{2}}e^{-\frac{5}{4}\pi - 2k\pi} \end{cases}$$

$g(k)$ は単調に減少し、 $h(k)$ は単調に増加する。また、

$$h(k) < 0 < g(k)$$

よって、 $k = 0$ のときを考えればよく、

$$x = \frac{\pi}{4} \text{ のとき最大値 } \frac{1}{\sqrt{2}}e^{-\frac{\pi}{4}}, \quad x = \frac{5}{4}\pi \text{ のとき最小値 } -\frac{1}{\sqrt{2}}e^{-\frac{5}{4}\pi}$$

(ii) $I_k = \int_{k\pi}^{(k+1)\pi} |f(x)|dx$ とすると、

$$\begin{aligned} I_0 &= \int_0^\pi e^{-x} \sin x dx \\ &= \left[-e^{-x} \sin x\right]_0^\pi + \int_0^\pi e^{-x} \cos x dx \\ &= \left[-e^{-x} \cos x\right]_0^\pi - \int_0^\pi e^{-x} \sin x dx \\ 2I_0 &= e^{-\pi} + e^0 \\ &= 1 + e^{-\pi} \\ \therefore I_0 &= \frac{1}{2}(1 + e^{-\pi}) \end{aligned}$$

ここで、①より、

$$I_k = e^{-k\pi} \int_0^\pi |f(x)|dx$$

よって、数列 $\{I_k\}$ は初項 I_0 、公比 $e^{-\pi}$ の等比数列なので、

$$\begin{aligned} V_n &= I_0 + I_1 + \dots + I_{2n-1} \\ &= \frac{1}{2}(1 + e^{-\pi}) \cdot \frac{1 - (e^{-\pi})^{2n}}{1 - e^{-\pi}} \\ &= \frac{(1 + e^{-\pi})(1 - e^{-2n\pi})}{2(1 - e^{-\pi})} \end{aligned}$$

$$\begin{aligned} \therefore \lim_{n \rightarrow \infty} V_n &= \lim_{n \rightarrow \infty} \frac{(1 + e^{-\pi})(1 - e^{-2n\pi})}{2(1 - e^{-\pi})} \\ &= \frac{1 + e^{-\pi}}{2(1 - e^{-\pi})} \end{aligned}$$

(別解)

$$V_n = \sum_{k=0}^{n-1} \int_{2k\pi}^{2(k+1)\pi} |f(x)| dx$$

$I_k = \int_{2k\pi}^{2(k+1)\pi} |f(x)| dx$ とすると, $2k\pi \leq x \leq (2k+1)\pi$ のとき $f(x) \geq 0$, $(2k+1)\pi \leq x \leq 2(k+1)\pi$ のとき $f(x) \leq 0$ より,

$$I_k = \int_{2k\pi}^{(2k+1)\pi} f(x) dx - \int_{(2k+1)\pi}^{2(k+1)\pi} f(x) dx$$

ここで, $J = \int e^{-x} \sin x dx$ とすると,

$$\begin{aligned} J &= -e^{-x} \sin x + \int e^{-x} \cos x dx \\ &= -e^{-x} \sin x - e^{-x} \cos x - \int e^{-x} \sin x dx \\ &= -e^{-x} (\sin x + \cos x) - J \end{aligned}$$

$$\therefore J = -\frac{1}{2} e^{-x} (\sin x + \cos x) + C \quad (C \text{ は積分定数})$$

よって,

$$\begin{aligned} I_k &= \left[-\frac{1}{2} e^{-x} (\sin x + \cos x) \right]_{2k\pi}^{(2k+1)\pi} + \left[\frac{1}{2} e^{-x} (\sin x + \cos x) \right]_{(2k+1)\pi}^{2(k+1)\pi} \\ &= -\frac{1}{2} e^{-(2k+1)\pi} \cos(2k+1)\pi + \frac{1}{2} e^{-2k\pi} \cos 2k\pi \\ &\quad + \frac{1}{2} e^{-2(k+1)\pi} \cos 2(k+1)\pi - \frac{1}{2} e^{-(2k+1)\pi} \cos(2k+1)\pi \\ &= e^{-(2k+1)\pi} + \frac{1}{2} e^{-2k\pi} + \frac{1}{2} e^{-2(k+1)\pi} \end{aligned}$$

したがって,

$$\begin{aligned} V_n &= \sum_{k=0}^{n-1} \left\{ e^{-(2k+1)\pi} + \frac{1}{2} e^{-2k\pi} + \frac{1}{2} e^{-2(k+1)\pi} \right\} \\ &= \sum_{k=0}^{n-1} \frac{1}{2} e^{-2k\pi} (2e^{-\pi} + 1 + e^{-2\pi}) \\ &= \frac{(2e^{-\pi} + 1 + e^{-2\pi})(1 - e^{-2n\pi})}{2(1 - e^{-2\pi})} \\ &= \frac{(e^{-\pi} + 1)^2 (1 - e^{-2n\pi})}{2(1 - e^{-2\pi})} \\ &= \frac{(1 + e^{-\pi})(1 - e^{-2n\pi})}{2(1 - e^{-\pi})} \end{aligned}$$

また, $0 < e^{-2\pi} < 1$ より,

$$\begin{aligned} \lim_{n \rightarrow \infty} V_n &= \lim_{n \rightarrow \infty} \frac{(1 + e^{-\pi})(1 - e^{-2n\pi})}{2(1 - e^{-\pi})} \\ &= \frac{1 + e^{-\pi}}{2(1 - e^{-\pi})} \end{aligned}$$

講評

[I] [小問集合] (標準)

- (i) 対数を取り $x + y$ の値を求めたあとは、 x, y の一方を消去すればよい。対数をとることに気付いても、その後の方針で戸惑った受験生も多いかも知れない。1 式目を $(x + y)$ 乗、2 式目を 10 乗して指数を比較することでも求められる。
- (ii) 2 次関数の最大・最小の問題。グラフを正確に描ければ易しい。基本的な問題。
- (iii) 平面ベクトルの問題。(6) は $\frac{1}{2} \sqrt{|\vec{OB}|^2 |\vec{OP}|^2 - (\vec{OB} \cdot \vec{OP})^2}$ で求められるが、比を用いて図形的に解くこともできる。

[II] [小問集合] (標準)

- (i) 領域における最大・最小の問題。絶対値の処理と、正確な作図が必要になる。
- (ii) 自然数の最大公約数、最小公倍数の問題。基本的ではあるが 3 数の条件の処理は難しい。

[III] [数Ⅲの積分法] (標準～やや難)

- (i) 減衰曲線の最大、最小の問題。極大値・極小値について、 x が π 増加するごとに、 y 座標の絶対値が $e^{-\pi}$ 倍されることに注目する。
- (ii) 初項 $\int_0^{\pi} |e^{-x} \sin x| dx$ 、公比 $e^{-\pi}$ の等比数列として処理できるかが鍵。

昨年に比べ計算量は減り、若干易化した。ただ、要所ごとに方針に戸惑うような問題もあり、8 割を取るの難しくなっている。解ける問題を正確に、確実に取る必要がある。目標点数は 75%。

メルマガ無料登録で全教科配信！ 本解答速報の内容に関するお問合せは…英進館メビオ ☎0120-192-215まで

医学部進学予備校
メビオ
 ☎ 0120-146-156
 受付 9~21時(土日祝可・携帯か50K)
 大阪市中央区石町 2-3-12
 ベルグオア天満橋
<https://www.mebio.co.jp/>

医学部専門予備校
YMS
 heart of medicine
 ☎ 03-3370-0410
 受付 8~20時(土日祝可)
 東京都渋谷区代々木
 1-37-14
<https://yms.ne.jp/>

医学部専門予備校
英進館メビオ
 福岡校
 ☎ 0120-192-215
 福岡市中央区渡辺通 4-8-20
 英進館 天神本館新2号館2階
<https://www.mebio-eishinkan.com/>